

種子島家墓地（御坊墓地）調査報告会 史料レジュメ

【史料1】「種子島家譜」卷一『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ四』、4頁

○時充

左近将監 入道名時榮

○母法号妙円大禪定尼九月三日死去、

○時充壮歳寢疾厚、自觉不免、約屬家統於同氏又太郎号所配、信式六男信直之子、信家之二男也、後得愈而生一子、頼時是也、於是、時充悔約、以謂殺又太郎、伝家

統頼時、招家臣密議、皆不可、(中略) 貞和二年三月十八日講射御坊在松嶽之上、招又太郎置酒肴醉之、後害之、(中略)

○安置又太郎靈野間村、諡日輪大明神、

【史料2】「種子島家譜」卷十九、天明七年（1787）十月十九日『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ四』、4頁

○十九日、唐山南京船主張兩滄、瓢到吾地赤尾木浦、時唐人劉孝死、請柩以葬于御坊、唐人五人從葬上山此時忌入死人於港内、入自築島、外植松塚上、不用僧徒、(中略) 做当

の二人于吾警衛船西村甚船奉行・知覽雲太善請奉行、訳者柳田休藏、各宰其事、(中略) 同二十七日、唐人王名病死、葬于湊冷水谷、唐人五人上山

從葬植松塚上不用僧徒、

【史料3】「種子島家譜」卷六十九、嘉永六年（1853）十一月廿六日『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ八』、711頁

○廿六日、奥医師格荒木陽沢病死、葬于御坊、

【史料4】「種子島家譜」卷六十九、天保九年（1838）七月廿三日『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ八』、457頁

○廿三日、御坊之墓所築石垣、

【史料5】「種子島家譜」卷七十六、万延元年（1860）二月四日『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ九』、35～37頁）

○二月四日、慈遠寺御坊累代墓石、文字漫滅不能弁某墓、即為某公之墓者數基、唯口碑伝某公之墓在於此耳、祖母夫人恐其逾久而逾失其真、於是文字粗存与口碑所伝、則採之、其余遺乎不可知拙者、則令本源寺日因^繁掣籤於墓前、採其籤所中而稱為某公之墓、又命記錄所作塋域之図而藏焉、今撮其略以記于左、所籤卜者、則加圈於識下以分之、
(中略)

御坊塋城之次第

東

受封院殿日開大居士	初代信基公	
温良院殿日恭大居士	二代信式公	一番
泰山院殿日仰大居士	三代信真公	
天遊久長大禪定門	四代真時公	

四公不知葬處、万延二年辛酉四月、創立石一基合祀之、

道円大禪定門	二番
五代時基公、文和元年壬辰正月廿九日、	
妙円大禪定尼○	三番
時基公之室、九月三日薨、不記年、	
春林時榮大禪定門	四番

六代時充公、慈遠寺旧記云、応永二乙亥 ^{不記} 月廿八日薨、葬于慈遠寺、奉木主祖師堂、	
妙本大禪定尼○	五番

時充公之室、応永十九年壬辰六月廿六日、
 清運大禪定門 六番
 七代頼時公、貞治五年丙午四月十六日、肥州日岡之戦殉難、
 世尊院殿日愨大居士 七番
 十六代久時公、慶長十六年辛亥十二月廿七日、
 妙宥大禪定尼 八番
 頼時公之室、応安六年癸丑七月八日、
 松林崇藤大禪定尼○ 九番
 清時公之室、慈遠寺過去帳以三月十四日為忌日、
 法性院殿日勝大居士 十番
 十四代時堯公、天正七年己卯十月二日、
 妙持大禪定尼○ 十一番
 幡時公之室、享徳元年四月十四日、
 隆尊大姉○ 十二番
 恵時公之室、天文元年己酉九月廿九日、
 真心院殿妙悟大姉○ 十三番
 十六代久時公之側室、元和九年癸丑九月十九日、
 照円大姉○ 十四番
 清時公之女子、為尼創妙法寺、応永三十二年正月十七日、
 本隆院日恵大律師○ 十五番
 清時公第六公子、帛釈住持於慈遠寺、自律宗入法華宗、明応二年癸丑十一月十五日寂、
 叙性院殿日莖大居士 十六番
 久基公第四公子、佐平太時純公、享保十五年庚戌八月二日、
 閑詮院殿妙真日淨大姉 十七番

久基公第二女公子^{於麻}_{佐君}、寛延三年庚午三月十二日、

宝光院殿一心崇有日輪大居士 十八番

二代信式公第六公子、左近信時之裔、貞和二年丙戌三月十八日、

西

【史料6】「種子島家譜」卷十二、享保七年（1722）三月廿一日『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ四』、258頁）

○廿一日、葬日尊大居士本源寺西之地^{於御坊}_{行禮式}、備記別卷、

【史料7】「種子島家譜」卷三十一、文化十二年（1815）二月八日『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ八』、63頁）

○八日、修宝光院殿葬礼於御坊、卯刻出棺本源寺、八郎次時中代久道而捧神主、開棺宜宝院、焼香遠妙寺、（中略）引導本源寺、畢而慈遠寺僧東乘院捧遺髮、散華僧十人隨之、宝篋印塔

【史料8】「種子島家譜」卷四十三、文政十年（1827）七月晦日『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ八』、243頁）

○晦日、葬清孝院殿、卯刻本源寺出棺、於慈遠寺境内御坊行葬礼、開棺大会寺代宜順院 日完、（中略）引導本源寺遠成院日健、岩河喜太郎時行代久道捧神主、日高杉右衛門代嬪人行香、其余略之、

【史料9】「種子島家譜」卷四十五、文政十二年（1829）七月三日『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ八』、270頁）

○七月三日、一島之僧徒尽会、修放光院殿葬礼于慈遠寺境内御坊、卯刻本源寺出棺、家老種子島五郎左衛門政賢捧神主、開棺知了院、

（中略）畢而慈遠寺塔中山之寺僧捧遺髮、散華僧十人從之、徒宇都經間道到本源寺墓所、納之于石棺中^{納束、盛箱、二重以絹包之}（後略）

【史料10】「種子島家譜」卷七十六、万延元年（1860）二月十日付鹿兒島役所覚書（『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ八』、270頁）

覚

波戸築方付、金千式百兩、一ヶ年ニ三百兩ツ、四ヶ年ニ御拝領と申廻、御都合成立、
来十一日御下金相成申候、就而者、爰許よりも功者成地方検者又者功者成夫御備下ニ可相成候間、折角手抜無之様下地有之様候可申越旨被仰出候、

(中略)

- 一御先祖様、
- 但、御坊御廟所者勿論、
- 一御伊勢様、
- 一蒲田大明神様、
- 一住吉大明神様、
- 一真所八幡様、
- 一宝満様、
- 一御崎様、
- 一熊野権現様、
- 一三ヶ寺、

(中略)

右、此節波戸築方御打立ニ付而者、山野海川ニ至迄、障をなし候儀ニ候得共、右之御神々御尊慮ニ不叶儀も有之候半、就而者、御用人より御隠居様御代参ニ而、此節普請ニ付而、定而御尊慮ニ不被叶儀茂可有之候得共、専ら国益之一筋を相考、後世之為ニ仕置度、深思慮を以打立申事候間、宜敷御推免被下、用夫其外一統災難無之様御守被下候様との趣を以、御願申上置候様可申越旨、承知いたし候、（後略）